



TITLE:

表紙ほか

AUTHOR(S):

CITATION:

表紙ほか. 京都大学言語学研究 2003, 22

ISSUE DATE:

2003-12-26

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/87837>

RIGHT:

京都大学言語学研究

第22号

論文

A Preliminary Study of the Language of Ethnic Koreans in China	
— Toward a Sociolinguistic Understanding —	Park Youngmae 1
Nouveau regard sur la phonologie des langues celtiques	
— le problème du système des résonantes —	Hiroyuki Suzuki 23
「V-(s)aseru」の不自然な用法をめぐって	早津 恵美子 67
日本語の生産的使役と語彙的使役の連続性について	
— 認知文法による分析に向けて —	今井 忍 119
格の素性分解によるフィンランド語構造格の分析	岸田 泰浩 137
ナイル諸語における「単数 (Singulative)」について	稗田 乃 187
マルマ語の音声に関する考察	藤原 敬介 237
元代の「擬蒙漢語」と現代の青海・甘肅方言	川澄 哲也 301
数量・程度を表すダケ節の統語論的特徴と解釈	
— 空演算子移動分析の観点から —	岡田 理恵子 325
韻母から見たチノ語音韻史	林 範彦 347

研究ノート

東京大学所蔵西夏文断片について	
— 西夏語訳『大智度論』断片 —	荒川 慎太郎 379
京都大学言語学懇話会 2003年度活動報告	391

2003

京都大学
大学院文学研究科
言語学研究室

「京都大学言語学研究」(23号)の原稿募集について

京都大学言語学研究(23号)の原稿を募集します。投稿される方は次の執筆要項によりご提出下さい。

執筆要項

1. 原稿種別

- (1) 研究論文
- (2) 研究ノート
- (3) 懇話会要旨

2. 研究論文

論文は完全原稿を提出すること。採用論文については後日フロッピーディスク(MOディスク、CD-Rなども可。)を提出する。電子メールでの投稿も可能ですので、ご相談下さい。

- (1) 原稿枚数: 図表などを含め A4 版用紙 30 枚程度とする。
- (2) 文字のサイズ: 日本語論文は明朝体 12 ポイント(1 行 37 字程度)・1 ページ 35 行程度、欧文論文は 12 ポイント・1 ページ 35 行程度(1.5 スペース程度)とする。
- (3) 原稿の余白設定等: 各ページのマージンを上下左右:30、35、30、30mm とる。ページ番号は印字せず、右下隅に鉛筆で記入する。
- (4) タイトルと氏名: 1 ページ目のはじめにタイトルと氏名(中央揃え)を入れること。タイトルは 14 ポイント太字とする。なお、タイトルの上部には 2 行分の余白を設け、タイトルと氏名の間に 1 行分、氏名と本文はじまりとの間に 2 行分の余白を設ける。
- (5) 注について: 注は通し番号をつけ、各ページの末尾におく。文字サイズは 10~11 ポイントとすることが望ましい。
- (6) 要旨: A4 版用紙 1 枚の要旨を付ける。要旨は本文と異なる言語で書くのが望ましい。原稿のスタイルやタイトルと氏名の体裁については上記に準ずる。要旨文のはじまりの左上部に「要旨」「Abstract」等と太字で表記し、要旨文のはじまりとの間に 1 行分の余白を設けること。
- (7) 採否: 原稿の採否については、編集委員会で決定させていただきます。
- (8) 原稿締切日: 2004 年 6 月 30 日必着

3. 研究ノート

- (1) 原稿枚数: 図表などを含め A4 版用紙 10 枚程度とする。
- (2) その他、スタイル等は、論文に準ずる。
- (3) 採否: 原稿の採否については、編集委員会で決定させていただきます。
- (4) 原稿締切日: 2004 年 6 月 30 日必着

4. 懇話会要旨

- (1) 「京都大学言語学懇話会」での発表の要旨を掲載します。原稿枚数は、A4 版用紙 1 枚とする。
- (2) その他、スタイル等は、論文に準ずる。
- (3) 原稿締切日: 随時

5. 連絡先

投稿は下記住所にて受け付けます。

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科 言語学研究室

電話/Fax:(075)753-2827

電子メール:KULR@ling.bun.kyoto-u.ac.jp

6. その他

- 採用された原稿及びフロッピーディスク類は返却いたしません。
- L^AT_EX で執筆する場合は、上記の書式に合わせたスタイルファイルを用意していますので、編集委員まで御連絡下さい。
- 抜き刷りの印刷費用は原則として投稿者の負担とさせていただきます。
- 執筆者には、掲載号を一部進呈いたします。
- 第 23 号は、2004 年 12 月発行を予定しています。

編集後記

『言語学研究』から『京都大学言語学研究』に名称を変更し、編集体制も刷新して、今号で4号目となりました。新規体制もようやく軌道に乗ってきた感があります。

編集委員一同、今後もより充実した雑誌を目指して努力していきたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

なお、次号より、原稿の締切りを2カ月早めて、6月末日としました。投稿をお考えの方はご注意ください。

編集委員長

2003 年 12 月 26 日

編集委員長 大浦真

副編集委員長 安部麻矢、林範彦。

編集委員 岡田理恵子、越智サユリ、川澄哲也、白井聡子、庄垣内正弘、田窪行則、
西村周浩、西村多恵、稗田乃、藤代節、藤原敬介、藪司郎、吉田和彦、
吉田豊。

(五十音順)

発行者 京都大学大学院文学研究科言語学研究室

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

Edited by OHURA Makoto, ABE Maya, HAYASHI Norihiko, OKADA Rieko,
OCHI Sayuri, KAWASUMI Tetsuya, SHIRAI Satoko, SHŌGAITO Masahiro,
TAKUBO Yukinori, NISHIMURA Kanehiro, NISHIMURA Tae, HIEDA Osamu,
FUJISHIRO Setsu, HUZIWARA Keisuke, YABU Shiro, YOSHIDA Kazuhiko,
YOSHIDA Yutaka.

Published by Department of Linguistics
Graduate School of Letters, Kyoto University
Yoshida Honmachi, Sakyo-ku, Kyoto
606-8501 Japan

Kyoto University Linguistic Research

Vol.22

Articles

PARK, Youngmae: A Preliminary Study of the Language of Ethnic Koreans in China	
— Toward a Sociolinguistic Understanding	1
SUZUKI, Hiroyuki: Reconsideration on the phonology of the Celtic languages	
— a problem in the resonants —	23
HAYATSU, Emiko: On nonstandard uses of “V-(s)aseru”	67
IMAI, Shinobu: On the continuum of productive and lexical causatives in Japanese	
— Toward a cognitive grammatical analysis —	119
KISHIDA, Yasuhiro: An Analysis of Finnish Structural Cases by Feature Decomposition	137
HIEDA, Osamu : On Singulative in Nilotic	187
HUZIWARA, Keisuke: A phonetic analysis of Marma	237
KAWASUMI, Tetsuya: Yuan Dynasty “Quasi-Mongolian Chinese” and Modern Qinghai, Gansu Dialect ..	301
OKADA, Rieko: Syntactic features and interpretations of <i>dake</i> -clauses	325
HAYASHI, Norihiko: Phonological process of Jino rhymes	347

Note

ARAKAWA, Shintaro: Tangut Fragments preserved in the University of Tokyo	
— The Tangut Version of the Mahāprajñāpāramitopadeśa —	379
The annual report of Kyoto University Linguistic Colloquium 2003	391



2003

Department of Linguistics
Graduate School of Letters
Kyoto University